寄稿1

# 阿寒アイヌクラフトセンターで受け継がれる先人の想いと技術

大澤　賢一（おおさわ　けんいち）
釧路市阿寒湖アイヌ施設推進室　室長

1969年釧路市生まれ。1992年３月、釧路公立大学卒業。同年４月、釧路市役所入庁。2018年４月、釧路市契約管理課課長などを経て、2020年から現職。

## アイヌ文化が色濃く残る阿寒湖アイヌコタン

私が勤務する釧路市阿寒町行政センター阿寒湖アイヌ施策推進室は、アイヌ文化がまちのあちこちで感じられる阿寒湖温泉にあります。

阿寒湖温泉はひがし北海道の阿寒摩周国立公園内にある温泉地で、その中に約120人のアイヌ民族が暮らす道内でも最大規模を誇るコタン（集落）、阿寒湖アイヌコタンがあります。阿寒湖アイヌコタン（以下、コタン）には伝統文化や技術を受け継ぐアイヌの人々が民芸品店や飲食店を構えており、近くにはアイヌの古式舞踊等の公演を行うアイヌシアターイコロがあります。

コタンは我が国の先住民族であるアイヌの人々が大切に守り受け継いできたアイヌ文化の精神性を感じられることとあわせ、現代的なものの見方や技術を取り入れきた伝統と革新が体現されている場所でもあります。

阿寒湖アイヌコタンの歴史を見ると、戦後、阿寒湖温泉では観光業が盛んになり、工芸品販売や歌、踊りといったアイヌ文化への需要が高まり、道内他地域からアイヌ工芸家等が移り住みました。昭和34年には当時の前田一歩園の園主・前田光子氏がアイヌ民族に土地を無償提供し、それまで温泉街で分散して生活していたアイヌの人々が集落を形成することとなりました。その後共同作業場も設置され、工芸品や民芸店が軒を連ねる現在のコタンの原型が出来上がり、工芸家の中からは故瀧口政満（たきぐちまさみつ）氏や故藤戸竹喜（ふじとたけき）氏、故床（とこ）ヌブリ氏など著名な工芸家が誕生しています。

こうした経緯もあり、阿寒湖温泉では古くからアイヌ民族と和人が協働したまちづくりを行ってきた側面があります。

アイヌコタン

### アイヌ文化・技術継承の課題

文化や技術の継承に欠かせないのが、それを担う人や経済力です。これまで阿寒湖のアイヌ文化や技術を受け継いでいくことができたのは、コタンに人がいて、経済力があったからと言えます。

しかしながら、現在ではコタンを支えてきた工芸家等が高齢化しており、さらにはアイヌ工芸をはじめとするアイヌ文化を担うべき次世代の担い手についても、地域経済の低迷による雇用機会の減少等により地元を離れて人材不足に陥っているという状況にあります。

このため阿寒湖のアイヌ文化の特徴である高い工芸技術を継承していくことが喫緊の課題となっています。

また、観光地である阿寒湖温泉において、アイヌ文化は誘客を図る上でも重要なコンテンツとなっています。このままコタンの活力が低下していくと観光地としての魅力低減につながっていくことが危惧されるため、アイヌ文化を活用した経済力向上を図る取組を行っていくことも課題となっていました。

### 課題に対応した取組

釧路市では国のアイヌ施策の一つであるアイヌ施策推進地域計画を作成しています。計画の目標には地域におけるアイヌ文化の着実な伝承・継承活動や様々な形でのアイヌ文化の発信等を通じて、アイヌの人々が民族としての誇りをもって生活でき、その誇りが尊重される地域社会の実現を目指すことを掲げています。令和元年に作成した最初の計画は同年９月に国の認定を受け、様々な取組を実施してきましたが、令和５年度末で計画期間が終了したため、現在は新たな計画を作成し令和６年３月に認定を受け、この地域計画に基づいた取組、具体的にはアイヌ政策推進交付金事業を実施しています。

### アイヌ政策推進交付金事業の取組

釧路市のアイヌ政策推進交付金事業は文化振興事業、地域・産業振興事業、コミュニティ活動支援事業の３つの分野で行っています。

文化振興分野の『伝統的なアイヌ文化・生活の場の再生支援事業』では、アイヌ民族の儀式や生活用具、料理等で必要となる植物等の自然素材を確保していくため釧路地域と阿寒地域で伝統的生活空間を再生する取組を実施しています。また、『阿寒湖原産のヒメマス祭り（カパチェプノミ）情報発信事業』ではヒメマスの恵みに感謝する儀式の情報発信に努めながら阿寒湖アイヌ文化のＰＲや文化伝承の取組として儀式の資料化等を行っています。

地域・産業振興事業分野では一例ではありますが、一般社団法人阿寒アイヌコンサルンによるアイヌ文化の価値向上の取組や知的財産保護事業等を支援する『阿寒湖アイヌ文化ブランド化に向けた知的財産保護事業』、アイヌ民族自らがガイドとなる『アイヌ文化ガイド事業』、アイヌシアターイコㇿで上演される演目の制作等を行う『アイヌ文化関連観光プロモーション事業』等を実施し、アイヌの人々の経済力の向上を図る取組を行っています。あわせて、こうした取組により観光資源としてのアイヌ文化の価値が高まり、他の地域にはない阿寒湖温泉ならではの魅力向上につながっているものと考えています。

### アイヌ工芸技術の継承

先程述べたコタンの成立過程から、コタンはもともと阿寒湖に暮らしていたアイヌの人々よりも全道各地から集まって移り住んだ人が多く、観光地であったことからも和人とも比較的良好な関係で共生してきました。こうした背景があるためアイヌ工芸をしたい和人の工芸家が移住してきても受け入れることに寛容であり、多くの才能ある工芸家が集まりお互いに刺激し合い優れた作家が輩出されました。また、コタンにはアイヌの伝統は守りつつも新しいことに挑戦する気風があったことから他の地域からやってきた工芸家などが様々な新しい作品を生みだす環境にあると言えます。

こうしたことからもアイヌ政策推進交付金を活用して実施するアイヌ工芸技術の継承では、３つの段階に分けて取組を行うこととしました。第１段階としてコタンの工芸家等を対象に技術を受け継ぐ人の増加や今

後講師役となる人材の養成を目的とした取組を行っています。第２段階では、第１段階で技術継承を受けた人が講師役となり、コタン外の人を対象にした技術継承を実施するなど、技術継承の範囲を拡大する段階としています。第３段階では第２段階で技術を学んだ人が、その技術を生かしコタンで店舗経営等の自立した経済活動を行う段階と考えています。

これまでの取組として、木彫分野での第１段階では、コタンの工芸家を対象にカムイニ（高さ８ｍ程の木材にアイヌ文様等を装飾した木彫作品）、丸木舟、イタオマチプ（板綴舟）といった大型木彫や、工芸家がこれまで制作する機会がなかった儀式刀や山刀等のアイヌの伝統的な道具の制作を行っています。この他、アイヌの伝統楽器であるムックリについても技術継承を行い、コタンの、主に女性の間で制作技術を広めています。コタンの工芸家等といった対象者を明確化した技術継承を段階的に進めることで、他の地域から人が来て学ぶ体制の構築が図られたものと考えています。これらの取組を踏まえて、主に地域外在住者への技術継承を図る取組に着手することができるようになりました。地域外在住者が阿寒湖温泉でアイヌ工芸の技術を学ぶことができる仕組みができることで、定住化が図られ、人材不足となっているコタンの現状の解消につながっていきます。

## 阿寒アイヌクラフトセンターの整備

こうしたアイヌ工芸等の技術継承の取組を進め、コタンの将来を担う人材を確保・育成するための拠点づくりとして、令和３年、釧路市ではそれまで釧路開発建設部が管理運営し旧阿寒湖温泉除雪ステーションを取得しました。

施設取得後は令和４年、５年の２カ年かけて改修し、２階建の構造はそのまま活用し、１階には刺繍・織物室、２階には木彫室とアイヌの伝統楽器ムックリの技術継承を行う研修室へと改修しています。除雪車両を格納していた車庫２棟は床面がコンクリート舗装のため、阿寒湖アイヌ工芸の特色でもある大型木彫作品の制作環境に非常に適したものとなっていたことから、大型木彫作品の制作施設に改修しています。これまで大型木彫作品の制作場所の確保に難儀していた工芸家にとって安全に技術継承が図られるのでとても良かったとの評価を得ています。また、施設の暖房には環境に配慮した暮らしを行ってきたアイヌ民族の自然観や、阿寒摩周国立公園がゼロカーボンパークに登録されたことを踏まえ、化石燃料を使用せず地元の温泉を熱利用する方式を採用しています。

令和６年５月、阿寒湖アイヌコタンの工芸技術等を次世代に継承していくための拠点施設・阿寒アイヌクラフトセンターとして稼働しています。

阿寒アイヌクラフトセンター

## 阿寒アイヌクラフトセンターを活用した担い手育成

令和６年度からスタートした研修事業には４人（道外出身者２人、市内出身者２人）の研修生が参加し、令和７年度までの２年間、アイヌ文化や工芸技術等を学んでいきます。研修生はコタンの将来を担っていくことから、コタンの工芸家等が研修講師として、木彫や刺繍・織物、ムックリや生活道具の制作技術や、伝統儀式やアイヌ語などの文化についても教えます。また、今後はコタンの店舗経営者として必要となる起業等に関する研修も予定しています。

研修１年目の現在は木彫、ムックリ、刺繍織物等の制作の基礎となる技術を学んでいますが、制作技術だけではなく知識の習得においても細かな指導がされています。木彫では、原材料となる木の材質や特徴、生息環境の他、彫刻刀等の工具の手入れや扱い方等、工

研修風景

芸家として必要な知識を丁寧に伝えています。また、この他にアイヌの伝統儀式については参加のみならず、儀式に必要となる祭具等の制作を行う等、儀式を支える裏方の役割も学んでいます。

阿寒アイヌクラフトセンター（以下、クラフトセンター）は、年間100万人が訪れる温泉観光地にあることから、観光客が多く訪れる土・日曜日も研修を行っています（その代わり月・火曜が休講日）。研修室に関して、木彫室は一部制限がありますが室内は見学できるようになっており、刺繍・織物室とムックリ制作室は研修室の壁をオープンファクトリーとしてガラス張りにしています。また、施設の外壁にはアイヌ文様を意匠に用いているほか、カーテン等の内装にもアイヌ文様を装飾し一目でアイヌ文化を感じられるようにしています。これらアイヌ文様には一般社団法人阿寒アイヌコンサルンに所属するアイヌ文化クリエーター（工芸家等）がデザインを行っています。また、クラフトセンターの愛称であるハリキキはアイヌ語で「頑張る、よく働く、努力する」を意味し、コタンの人が考えたものであり、クラフトセンターには多くのアイヌの人々の想いが込められています。

刺繍の研修

木彫りの研修

また、同施設はアイヌ工芸技術の担い手の研修施設ですが、アイヌ文化等の情報発信の役割を担っていることから、施設を訪れる方には阿寒湖アイヌ施策推進室の職員が説明を行うことがあります。令和６年５月のオープンから12月までの間で、600人を超える方にクラフトセンターやアイヌ文化、工芸技術について説明することができました。説明を受けた方からはアイヌ文化への興味関心が高まった、アイヌ民族の工芸技術を間近に見ることができ貴重な体験が得られて良かったとの感想が寄せられていますが、こうした広報活動は、来館者のみならず、アイヌの人々からもアイヌ文化への理解が高まるとの評価を得ており、アイヌ関係者と行政が連携することで、観光客にとって満足度の高い滞在につながっているものとして、やりがいを感じています。

アイヌ語の研修

## 受け継がれていくアイヌ文化と工芸技術

阿寒アイヌクラフトセンター「ハリキキ」はアイヌ工芸技術の担い手を育成する拠点としてこれから多くの人材を養成し輩出していくことになります。こうした取組により地域にとって必要な人材が確保され、地域の持続的発展、活性化につながっていくものと考えております。

アイヌ民族の貴重な文化や工芸技術が将来地域を支えていく人々に受け継がれていくのを間近に見ながら、人が織りなす文化が連綿とつながっていくことの大切さをあらためて感じています。